チュワン州の平均農地規模は八四五エーカー)、土地は肥沃で、主にポテト(プリンス・エドワード島、ニュー・ブランズウィック)や野菜、リンゴなどを産している。

一方、太平洋側のブリティッシュ・コロンビアでは、温暖な気候を反映して園芸と酪農が農業の中心になっている。オカナガン平野はりんご、梨、もも、さくらんぼで有名。そのほか、バンクーバー島などの州南部では、いろいろな果物や野菜、花が豊富に栽培されている。

カナダの農耕地、牧草地は、その大半が米国との国境から五百キロ内に位置しているが、ほとんど唯一の例外はアルバータ州とブリティッシュ・コロンビア州北部のピース・リバー平野一帯。寒冷な気候のために成長期が短く、農業生産は限られるが、夏が長いため、小麦や飼料用穀類の成長にはよく適している。

●交配種とうもろこし　カナダの交配種とうもろこし生産は年間1億4000万ブッシェル(価格にしておよそ3億ドル)にのぼり、だんだん重要性を増してきた。交配種とうもろこしがオンタリオ州ではじめて栽培された1937年以来、作付け面積は15倍もふえた。その間、いろいろな交配実験によって、30もの新しい品種が開発された。

カナダ農業の特徴

カナダにおける農地の形態は、一エーカーぐらいの土地に建てられた養鶏場(ブロイラー工場)から、数十キロも広がる牧場までいろいろあり、一般化することはむずかしい。あえて言えば、家族経営が主体になっているのが特徴で、三六万六千の農地(一九七一年国勢調査)のうち、家族経営でないのはわずか一千に過ぎない。土地は自己所有が大半を占めるが、所有地が大き過ぎて一部を賃貸する農家もある。

カナダの農業従事者は、一人当り五〇人分の食糧を供給するといわれている。農業生産高は増えたが、農業人口は減少し、そのギャップを機械が埋めた。今日、カナダの農村人口は全人口の七パーセントに満たない。

カナダの農業のもうひとつの大きな特徴は、それが高度に機械化されていることである。各農家にはトラクターやトラックが必ず備えられ、カナダ西部では自動コンバイン刈入れ機が穀類の収穫を全部やってのける。飼料用穀類は、ベイラー(梱包機)、刈取り機、干し草刻み機、干し草積み上げ器などを使って処理される。トラクターの運転手席から水圧によって操作されるすき、まぐわ(ハロー)、円板すき、中耕機、除草機などによって土を手入れし、トラクターが大型条播機(浅いうねを作りながら種子をまき、その上に土をかぶせる機具)や円板すきをけん引して、播種、施肥を同時に行う。ポテトやてんさい、野菜、タバコ、苗木などを植えるための特殊な機械も考案されている。

各種の作物には肥料がたっぷり使われる。また雑草や害虫を駆除するため、殺虫剤や除草剤が散布される。化学肥料や農薬は、連邦政府がその安全性について厳しく取締っていることは言うまでもない。

こうしてカナダは、国内需要をはるかに上回る食糧を生産することが可能となった。昨年の農産物輸出は四〇億ドル近くに達し、九億ドルの出超をマークした。最大の輸出品は小麦で、昨年は一七億ドルにのぼる小麦が欧州共同体、日本、ソ連などを中心に輸出された。畜産関係では、日本向けの多い豚肉の輸出が一億四百万ドルに、また米国向けの牛肉の輸出が五千六百万ドルに達した。

●小麦　毎年、夏がくると、琥珀色の麦の穂波が、見渡す限りカナダの大平原を埋めつくす。小麦はカナダ農業の代表選手だ。気候の変化や疫病、害虫に強い品種が研究開発された結果、生産も大いに上がった。ビールス性の小麦すじモザイク病は栽培過程を通じて抑えられるが、最近の研究でこの病気に強い品種が開発できることがわかっている。茎の中で幼虫が育ち、ついには茎を枯らす小麦ハバチに強い小麦や、穂麦が地面にたれ落ちないように、茎のしっかりした品種も育成されている。このような品種改善の結果、カナダ全体で年間6億2870万ブッシェルもの小麦が生産されている。

トに近いのもあり(日本のそばも、ほとんどカナダ産の〝そば〟が原料)、カナダは日本にとってきわめて重要度の高い食糧供給国といえよう。

カナダは、さらに、日本の畜産業の発展に大きな役割を果たしてきた。オンタリオ州から送られた多数のホルスタイン種種牛は、気候風土のよく似た北海道によくなじみ、優秀な乳牛を数多く繁殖させた。最近では、カナダ産の肉牛(アルバータ州のアンガス種とサスカチュワン州のヘックスフォード種)が同じ目的で日本に輸出され、青森や北海道で品種改良に役立っている。これらの肉牛は、生育が簡単でおとなしい。飼料を肉に転換するいわゆる飼料効率が高いため、生産コストがあまりかからないのが大きな特徴である。このほか、カナダは、これまで上質で耐病性の強い産卵鶏や鶏肉ブリーダーを日本に供給し、日本の鶏卵、鶏肉業の振興にも大きく寄与している。

一方、日本からは、明治時代からカナダに送られていたみかんが、クリスマスにはストッキングの詰め物として欠かせないものとなり、昨年の輸入額は千百三十三万ドルにのぼった。その他の食糧品では、まぐろ類かんづめ(千七百七十万ドル)、貝かんづめ、かきかんづめ、かんきつ類などが主な対日輸入品で、総額はおよそ四千三百万ドル。

カナダの対日食糧輸出は、一九七三年以来四〇パーセントも伸びた。世界的な穀物、食糧生産国であるカナダは、日本に対して安定した食糧供給を行ってきており、その対日農産物貿易は今後も順調に拡大するものと期待される。